

濱一衛先生の学恩

阿部, 泰記

山口大学 : 名誉教授 | 長江大学 : 講座教授

<https://hdl.handle.net/2324/1916223>

出版情報 : “《春水》手稿与日中文学交流 : 周作人、冰心、濱一衛” 国際学術研究会論文集. 1, pp.208-210, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン :

権利関係 :



濱一衛先生の学恩

山口大学名誉教授、長江大学講座教授 阿部 泰記

濱一衛先生が世を去られて久しい。私自身も三年前に大学を退職し、「私と研究の縁」という演題で最終講義を行った。

人は「縁」によって生きている。大学入学当時はいろんな選択肢があったが、結局、中国文学という分野を選んで進学した。それは濱先生との出会いがあったからである。

濱先生は授業では中国の詩歌を講義されていた。毎週プリントを配布されて丁寧に説明された。ただ私が特に啓発を受けたのは、その後大学紛争が激しくなり、授業が行われず、先生の研究室を訪ねたことからである。

先生は時折、夏みかんを食されながら、気さくに高校を卒業したばかりの青二才の私に中国文学を紹介された。その中で私が今でも大事に思っているのは佐藤春夫訳『水滸伝』である。図書館は最初の二巻しか所蔵していなかったが、黒旋風李逵の乱暴さが私を引き付けた。

そして濱先生の紹介によって中国文学研究室を訪ねて、助手や大学院生の方が暖かく迎えてくださったことが専攻を決定した。私はシラーの戯曲『群盗』やモーツァルトの音楽も好きであり、ドイツ文学を選択する可能性もあったが、濱先生のような親切な方に遭遇しなかった。

だが私は先生の研究に関しては疎かった。「周さん」といつもおっしゃるかたが周作人であったことはその時はわからなかった。また周作人の作品も読んではいなかった。演劇の話題もあまり私の関心を引かなかった。学部の演習で革命洋板戯『沙家浜』を読まれた。私はLPレコードも購入したが、どこがよいのか、さっぱりわからなかった。今考えると、先生は日本の侵略戦争とたたかう中国人民の姿を学生に示されたかったに違いない。将校が入浴するときにその足を洗わされたことを口惜しそうにおっしゃり、戦争に負けたのも軍人のこうした墮落が原因だと嘆いておられたことを思い出す。

私は戦後世代であり、むしろ大学院の演習で読まれた崑曲『十五貫』が私の好奇心を満足させた。私が学部生であったので濱先生は不愉快に思われていたようであるが、後に私が公案小説研究でこの戯曲が李漁の小説を下敷きにしていることを論文にしたのは、濱先生がそれでも寛大に私の受講をお許しくださったからにほかならない。

私は濱先生のような戯曲研究をすることはなく、『金瓶梅詞話』を卒業論文として研究するようになった。それは小野忍・千田九一訳があり、当時の助手の方に推薦されて読ん

だことがきっかけである。翻訳を片手に大安から出版された影印本を読むのに夏休みを費やした。濱先生からは作品を近代的な手法で分析するより、食物や衣服の名前など語彙について研究するのも方法だよと助言をいただいた。それは後に先生の大著『日本芸能の源流—散楽考』を読んで、なるほどと思ったものである。そうした考証は『金瓶梅』では江戸時代から高階正異らも行っていたことを後に知ったが、その頃、学のない私にそうした考証ができるはずもなかった。しかも当時若かった私はフロイトなど西洋の学術理論に影響を受けていて、人の欲望をテーマとする『金瓶梅』は私の好む作品であった。私の考証としての研究は、『金瓶梅詞話』は写本が整理されないまま出版されたテキストだと指摘するにとどまっておき、それについては今では心中忸怩たる思いがある。

先生は戯曲テキストの現代注釈本についても、丹念に語彙の注釈を切り取ってカードを作成しておられた。私の同級生たちは学園紛争で研究室が占拠され、紛失してしまうのではないかと恐れていたが、それは免れたことを知って、みな安心していた。後に原本と照合した戯曲語彙索引が作成されたため、カードの役割もそれほどではなくなったわけであるが、先生の時代には索引もなく、このカードは至極有用なものであったのである。

濱先生は中国各地の演劇上演を鑑賞されて、その資料は九州大学図書館に所蔵されており、中里見敬氏らによって詳細に紹介されている。私は先生のような戯曲通としてではなく、研究の「縁」によって、先生が御覧になった「河南墜子」などの地方劇の良さを知ることとなった。

ちなみに私が中国に留学したのは文化大革命の後の1983年であり、研究条件は整っていなかった。戯曲や小説のテキストを収集しようにも閲覧が許されなかったため、ほとんどの時間を旅行に費やした。研究成果としては北京図書館の小説『翡翠軒』と杭州図書館の『解縉集』を紹介したくらいである。だが旅行が良いこともあった。私は北京の中央戯曲学院に40日間滞在した。中央戯曲学院は王府井にあり、付近の金魚胡同の吉祥戲院では京劇を毎晩11時までかぶりつきで見ることができたからである。そこで京劇というものを実際に知ることができた。しかしこの吉祥戲院をはじめ北京の劇場はほとんど今ではなくなった。少し後に私は上海や江蘇省の都市で「評彈」という琵琶と三絃を伴奏とする語り物を見て回ったが、これらの書場もほとんどがなくなっている。こうした演芸場は経済活動の妨げとなるとして取り壊され、あるいは東安市場となり、あるいは南京路の歩行街となったのである。古いものはいずれ淘汰されていく運命にあるのだろうか。最近、私は湖北省の「漢川善書」や湖南省の「澧州大鼓」などを見てきた。それらの地域は比較的交通が不便であり、伝統演芸がなお喜ばれており、日常的に上演されている。こうした演芸も何か工夫をしないかぎり、いずれは失われていくのかも知れないという危惧を覚える次第である。

濱先生は観劇の切符を多く保存されているが、私は先生が御覧になったような劇場を最後に見ることができた者のひとりであろう。寂しいものである。ただ私の脳裏には当時の上演のありさまが刻み込まれており、ネット上で多くの演劇作品が紹介されるようになった今、短期間の旅行中で見ることができなかった多くの作品をその時の経験を思い出しながら鑑賞できることはありがたいことである。

濱先生は前述のように、中国の演芸だけではなく、日本の演芸のルーツについても考証されている。私も嚮に倣って演芸を通じた王昭君故事の伝来を明らかにしたいと努めているが、謡曲が敦煌変文の影響を受けたかどうかなども明らかにできず、表面をなでるだけで深層に迫りえないもどかしさを覚えながら、いつもニコニコと笑顔を絶やされなかった優しい先生のお姿を思い浮かべて苦闘を続けている。

平成 29 年 11 月 26 日 山口市平井の自宅にて